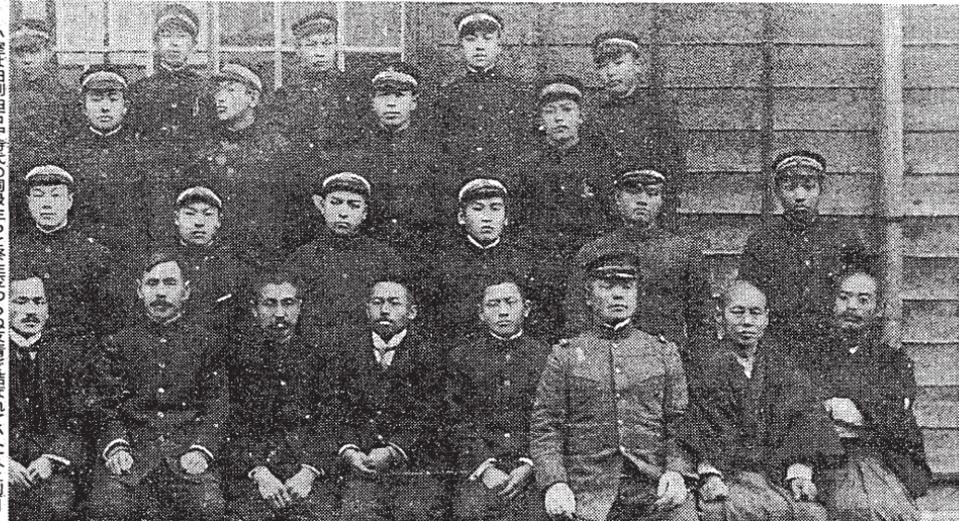


小室は旧制白石中時代の同級生らと終走わらぬ友情で結ばれていた(二列目右端が小室、三列目右から三人目が佐藤忠太郎)



# 政宗騎馬像余話

小室達日記から



仙台城跡にある伊達政宗騎馬像がどとうた致射な連命を語るには、やはり順を追って記さねばなるまい。話は昭和ヒトケタの時代までさかのぼる。

一昨年の藩祖政宗三百五十年祭はまは記憶に新しいが、その五十年前の昭和十年は、政宗が世を去ってから三百年たった三百年祭に当たっていた。

この記念すべき年に、奥連合青年団は広く寄付金を募って、政宗公の甲冑(かっちゅう)騎馬像の銅像を建立することを決めた。昭和八年のことである。

計画が明らかになるも、大変な苦難を巻き起こした。同年五月の河北新報投書欄に次のような投稿があった。

「未だに作者の決定を見ない事に私は無関心では作れない。何となれば一つの作品を成すまでどう作家の努力、これを充分らしめなうで、作品に傑作を現すこ

## 彫刻にささげた人

とは出来ないう、之をさそうるには短の時間を要するから(中略)作者の選定だが郷士の生人佐藤家を以てすること第一と考えてほしい。相対する作家がわが仙台藩内に現存していないのなら知らず、現在地方の適任者を看過して、人選するといううな(ママ)はやってもらいたくない(白石 佐藤忠太郎)

佐藤は、柴田町(当時梅郷大町)入田出身の帝國美術師委員小室の旧制白石中時代の同級生で親友。地元出身の彫刻家の中から早く作者を選べると正論を述べながら、側面から小室を推薦していたのであろう。小室は親友の努力に感謝し手紙を送っていた。

「君達の御情と御奔走によりたんだん製作に決定される模様になってきたので、私も私に決定したと気が持ちとなり、世界的偉人

▷②

# 作者決めた友情

作の心配が大きいと思われまじし決定した今年(昭和)の青展と来年の青展との差を一心懸けて、東郷に任ず小室に代わつて、奥内の方面に働きかけ、進力を注ぎ、あらゆるものを犠牲として、万難を排して、

山公(政宗)の心になって精進します。」

このすさまじいまでの意気込みが青年団にも届いたのであろう。同年六月、小室は志願を休む一心で、東郷に任ず小室に代わつて、奥内の方面に働きかけ、進力を注ぎ、あらゆるものを犠牲として、万難を排して、

この後、小室の苦闘が始まるのだが、それは順次紹介するとして、ここでは小室在藤の友情を示すような、不思議なエピソードに触れておこう。

小室の業績を調べ続け、柴田町親大小学校後藤藤三(三宅)は、奥教委が昨年三月発行した小学校進徳郷土資料「どうとく」を開いた時の書きを今も楽しそうに語る。

「小室さんと佐藤さんが一緒に紹介されているんです。全くの偶然。びっくりしました。」

小室が「一生を彫刻にささげた人」として、佐藤は「和紙の美しさをひかれし和紙工芸を創始した人」として、ともに友情の心を打っている。友情は二人の死後も続いていると言わねばかりの話ではないか。

この友情をはぐくんだ旧制中学時代の小室の生き方は、今の教育ママが聞いたら倒せんばかりの破天荒なものだった。

(敬称略)